

『資本制生産に先行する諸形態』について(四)

井 上 周 八

一 はじめに

二 『アジア的生産様式』論争について

三 資本制生産に先行する所有の三つの形態について

(一) 『ドイツ・イデオロギー』における所有の三形態

(二) 『資本制生産に先行する諸形態』における所有の三形態

四 『諸形態』をめぐる若干の問題点

(一) 『諸形態』の共同体と『ドイツ・イデオロギー』の共同体

(二) 所有の三形態の時間的継続関係

(三) 生産様式の時間的継続関係

① ホブズボームの解釈……(以上既載)

② 塩沢君夫氏の見解

(四) 過渡期の国家について

五 アジア的生産様式は「社会的生産過程の敵対的形態」か

(一) 総体奴隷制は階級社会か

(二) 原秀三郎氏による塩沢説批判

① 原氏による『諸形態』の論理的構成の把握

② 塩沢君夫氏の見解

塩沢氏は、『諸形態』はマルクスがモルガンやマウラーの著

『資本制生産に先行する諸形態』について(四)

作を読む前のものであり、未完成の見解なので、基本的には正しいが、個々の点ではその後の文献の方を重視すべきであると主張されている。ここで氏のいう「未完成」ということばは曖昧であるが、しかし未完成とは反対に、『諸形態』は個々の点や叙述の形式では不十分と批判もできるであろうが、理論的著作としては極めて高度な論稿である。⁽²¹⁾

(21) ホブズボームは「マルクスとエンゲルスの歴史的知識や、まだこれらの知識とはなりえなかったものを簡単に調べ」(前掲書一九ページ)たのち、要約して「先史時代、原始共同体社会、ロンブス以前のアメリカについての知識は(ともかくも『諸形態』起稿中の時期には)貧弱であり、アメリカについては事実上欠如していた。古代ないし中世の中東については大したものではなかったが、アジアの特定部分とくにインドについては明らかに優れている。しかし、日本についてはだめである。古典古代とヨーロッパ中世については優秀である。ただし、この時代に対するマルクスの興味にはむらがあった(エンゲルスの方は、それほどでもなかったが)。時代としては、資本主義興隆期の知識が際立っていた。もちろん、兩人とも歴史を精密に研究していた。しかし、前産業的あるいは非ヨーロッパ的社会的歴史とくに没頭した時期が、おそらくはマルク

『資本制生産に先行する諸形態』について(四)

スの生涯に二回あった。すなわち一八五〇年という『経済学批判』起稿に先立つ時期と、もう一つは『資本論』第一巻を世に問い、その第二巻、第三巻を書き上げた直後の一八七〇年代で、このときのマルクスは東ヨーロッパおよび原始社会に重点をおいた歴史研究に転じたようである、これは多分、かれがロシアにおける革命の可能性に関心を失ったことに関連するものであらう(同上二六―七ページ)とのべている。

しかし、右のことがその通りであったとしても、『諸形態』のもつ意義がすこしも減少するものでないことは『諸形態』の内容そのものが示している、という点は多くの人の認めるところである。多くの人が『諸形態』を取り上げて論議を続けていること自体が、その証左である。

塩沢氏の所論は、のちにみるように、原秀三郎氏によって、「アジア的生産様式」という概念の成立と発展を年代的に追跡する方法」、「論理段階」抽象的位置の確定という第一義的な視覚を欠落した層位年代学的ともいべき方法」とよばれ、批判の対象とされているが、では氏の主張の内容はどのように展開されていたのか。氏の著書『古代専制国家の構造』(御茶の水書房、一九五八年一月)によってみよう。

氏は、マルクスとエンゲルスの資本制以前の諸社会に関する意見、とくに共同体や生産様式の諸形態についての見解がよく示されている主な文献を、その書かれた年代順に次のように整理される。

- 「一八四五年 マルクス・エンゲルス」ドイツ・イデオロギ
 一
 一八五三年 マルクス「印度におけるイギリスの支配」
 一八五七―八年 マルクス「資本制生産に先行する諸形態」
 一八五九年 マルクス「経済学批判」
 一八六七年 マルクス「資本論」第一巻第一版
 一八六八年 マルクス「エンゲルス宛手紙」(マルクスがこのころ初めてマウラーの著作を読んだらしいことが、この手紙の中にしるされている)
 一八七三年 マルクス「資本論」第一巻第二版
 一八七五年 エンゲルス「ロシアの社会関係」
 一八七七年 エンゲルス「反デューリング論」
 一八七七年 (モルガン「古代社会」)
 一八八一年 マルクス「ヴェラ・ザスリッチ宛の手紙」
 一八八一―二年 エンゲルス「フランク時代」
 一八八二年 エンゲルス「マルク」(「空想から科学へ」ドイツ語版附録)
 一八八四年 エンゲルス「家族・私有財産および国家の起源」第一版
 一八九一年 エンゲルス「起源」第二版(完成) (前掲書五
 一六ページ)
 ついでにふれておくと、望月清司氏も『諸形態』を中心としてマルクスのアジア社会分析に寄与した主要諸文献を時代順に

次のように配列している。

(はじめの年代は出版年。これらはマルクスが読んでかれの著作に引用したもの。ただし読んだ時期は不明。なおケネー、モンテスキュー、スミスなどは除外)

「1 一六六八年……F・ベルニエ」モガール大帝諸国旅行記

2 一八一七年……T・S・ラッフルズ「ジャヴァ史」二巻

3 一八一八年……J・ミル「英領インド史」五巻

4 一八一九年……M・S・エルフィンストン「南インド

に関する報告」

5 一八三一年……J・ミル「植民地」(ブリタニカ百科辞

典補遺)「マルクスの読んだ版。初出は一八一八年」

6 一八三一年……R・ジョーンズ「富の分配ならびに租税

の源泉に関する一考察」

7 一八三七年……ヘーゲル「歴史哲学講義」

8 一八四五年……『ドイツ・イデオロギー』

9 一八五二年……G・キャンベル「近代インド」

10 一八五三年……『インドにおけるイギリスの支配』ほか

諸論文(以下『第一次インド通信』と略称する)

11 一八五七年七月↓一八五九年四月……『第二次インド通

信』

12 一八五七年十月↓五八年三月……『諸形態』・『経済学

批判序説』を含む『経済学批判要綱』の草案脱稿

『資本制生産に先行する諸形態』について(四)

13 一八五九年一月……『経済学批判』(序言)

14 一八六一年↓六三年……「剰余価値学説史」手稿

15 一八六七年『資本論』第一巻初版(以下省略)

(望月清司「マルクス『諸形態』の研究」、専修大学社会科学研究所

『社会科学年報』第一号、一九六六年三月、一八〇—一八一ページ)

そして塩沢氏は、右の望月氏の表を参照し、これと塩沢氏が

主として『諸形態』以後について『古代専制国家の構造』で作

ったさきの年表とを合わせて、マルクスのアジア社会観、アジ

アの生産様式の発展を示す主要文献をそのご次のように表示さ

れている。

「第一期 一六六八年 F・ベルニエ」モガール大帝諸国旅行

記」

一八一七年 T・S・ラッフルズ「ジャヴァ史」二

巻

一八一八年 J・ミル「英領インド史」(五巻)

一八一九年 M・S・エルフィンストン「南イン

ドに関する報告」

一八三一年 J・ミル「植民地」(ブリタニカ百科

辞典補遺)

一八三一年 R・ジョーンズ「富の分配ならびに租

税の源泉に関する一考察」

一八三七年 W・F・ヘーゲル「歴史哲学講義」

一八四五年 マルクス・エンゲルス「ドイツ・イデ

『資本制生産に先行する諸形態』について（四）

オロギー

一八五二年 G・キャンベル「近代インド」

一八五三年 マルクス「インドにおけるイギリスの

支配」その他のインド通信

第二期 一八五七・八年 マルクス「資本制生産に先行する

諸形態」(草稿)

一八五九年 マルクス「経済学批判」

第三期 一八六七年 マルクス「資本論」(第一巻初版)

一八六八年 マルクス「エンゲルス宛書簡」(マル

クスがこのころ初めてマウラーの著作をよんだらしいことがかかっている。)

一八七三年 マルクス「資本論」(第一巻第二版)

一八七五年 エンゲルス「ロシアの社会関係」

一八七七年 エンゲルス「反デューリング論」

第四期 一八七七年 H・モルガン「古代社会」

一八八一年 マルクス「ヴェラ・ザスリッチ宛書

簡」(草稿)

一八八二年 エンゲルス「マルク」

一八八四年 エンゲルス「家族・私有財産および国

家の起源」(第一版)

一八九六年 エンゲルス「起源」(第二版) (塩沢

君夫「マルクスにおけるアジアの生産様式概念の成立と発展」、内田義彦・小林昇編『資本主義の思想構造』、岩波書

店、一九六八年八月、二一—二二(ページ)

以上のように整理されたのち、塩沢氏は、マルクスの時代で、もっとも注目すべき劃期的労作は、マウラーの『マルク共同体』と、モルガンの『古代社会』であるにもかかわらず、マルクスがこのマウラーの著作を読んだと思われる年が、一八六八年頃であつたらしいことは、すべて藤原浩氏の論文「『ゲルマン的共同体』とは何か」(『思想』一九五七年一月号)に明らかにされた通りであるとして以下のようにいう。

「すなわち、一八六八年三月一日附のマルクスのエンゲルス宛の手紙の内容を、(藤原)氏は次のように紹介し、この手紙の文面と語気は、マルクスがこの頃はじめてマウラーを読んだことを示していると主張された。

『マウラーは、最初から私的所有があつたのではないことを十分に示した。ドイツ人はまずてんでに定住し、のちになつては村落・ガウなどを形成したという、ウェストファーレンのユンカーの見解(メーザーその他)は馬鹿げている。ドイツに今日なお、ところどころにロシア流の土地割替がのこっているのは面白い。ヨーロッパにも最初はアジア的ないしインド的所有形態があるという私の出した見解に、マウラーは新しい見解を与えた』(藤原氏論文、六八頁) (『古代専制国家の構造』セページ)。

そして、このように、マルクスがマウラーの『マルク共同体』を読んだのが、一八六八年頃であつたとすると、『資本制生産に先行する諸形態』や『経済学批判』などが書かれたの

は、マルクスがマウラー〔Georg Ludwig von Maures (1790—1872) の中世ゲルマン民族の共同体の諸形態に関する研究、とくにマルク共同体の研究は画期的な業績であり、主著『ドイツ人の共同体的生活の研究』一二巻(一八五四年—一七一年)は実証的研究として深刻な影響を及ぼしたのであるが、その第一巻が有名な『マルク、ホーフ、村落および都市制度史への序論』であり、原始ゲルマン村落に土地所有が存在したことを強調した問題作であった〕さえ読んでいない頃のものであった。

また、次に「当時まで全く未知であった有史以前の社会について、最初の統一的・実証的な体系をつくりあげたモルガンの『古代社会』が出版されたのが、一八七七年であるということを見ると、マルクスとエンゲルスが、『古代社会』を読んでから書いたものは、マルクスの『ヴェラ・ザスリッチ宛の手紙』と、エンゲルスの『マルク』・『フランク時代』・『家族・私有財産および国家の起源』などであるということがわかる」(同上)とされる。

以上のことから、塩沢氏は、マルクスとエンゲルスの古代社会に関する理論の発展を、便宜上ほぼ三つの時期にわけてみることができる、という。「第一期は、マウラーを読む前の『資本制生産に先行する諸形態』・『経済学批判』をはじめとして、『ドイツ・イデオロギー』・『インドにおけるイギリスの支配』などの時期である。第二期は、モルガンの『古代社会』を読む前の、『資本論』・『反デューリング論』などの時期であり、第

『資本制生産に先行する諸形態』について(四)

三期は、モルガンを読んだあとの『ヴェラ・ザスリッチ宛の手紙』や『家族・私有財産および国家の起源』・『フランク時代』・『マルク』などの時期であり、この第三期の諸文献をもっとも完成された理論と考えることができる」(同上七八ページ)。

このようにのべたあと、塩沢氏は、これまで、共同体や生産様式に関するマルクスとエンゲルスの見解を論ずるとき、『諸形態』の見解のみを主な理論的根拠としているものが多かったが、「しかし、以上の年表によってもわかるように、『諸形態』は、マルクスがまだモルガンやマウラーの著作を読む前のものであって、きわめて乏しい資料によって書いたものであり、マルクスにとって、その後の研究のための論理的な見通し程度のものにすぎなかったのではないかと思われる。もちろん、基本的な点では、『諸見解』の見解は決してあやまってはいなかったものであって、ここに示された論理は、最後までつらぬかれていたのであるが、個々の点では、理論的にも実証的にも、まだ完成されたものとはいえないのである。したがって、マルクスの見解を知るためには、『諸形態』よりも『資本論』以後の第二期・第三期の文献の方を、より多く重視すべきであり、『諸形態』と第二期・第三期の文献とで、ちがった表現をしているような場合には、『諸形態』の方をとるべきではないと考える」(同上八ページ)という。

以上のような立場から、塩沢氏は、マルクスとエンゲルスの見解を、第一・第二・第三の各時期別に読みかえして、次のよ

うな見解を示された。

第一期は、もっとも初期の見解であり、この時期の文献の中でもっとも重要なものは、『諸形態』である。しかし、『諸形態』はマルクスがモルガンやマウラーの著作を読む前に書かれたものだから、ここでの見解は、当時の乏しい資料によって打ち立てられた最初の統一の見解であり、マルクスにとってはその後の研究のための理論的見通しとでもいうべきものであり、マルクスはこれを死ぬまで草稿として発表せずにおいた不完全なものであった。このために、『諸形態』の中には表現のあいまいな個所や混乱があり、現在の学界の理論的混乱の一つの大きな原因となっている。だから、『諸形態』は、次のような読み方をするのがもっとも生産的である。すなわち、『諸形態』より後の著作にみられるマルクスの完成された見解に發展する芽が、『諸形態』の中でどのように出ているかという立場で読むべきである。この立場で読んでみると、『諸形態』の見解は、基本的にはマルクスの最後の完成された理論とほとんど完全に一致している。

マルクスはこの草稿で、(一)東洋的、あるいはアジア的、(二)古典古代的、あるいはギリシャ・ローマ的、(三)ゲルマン的という三つの土地所有形態について説明している。これを集団Ⅱ共同体の立場からみるときは、この三形態は同時に、共同体の三形態として読むことができる。すなわち、三つの土地所有形態に照応して、それぞれ共同体のアジア的・古典古代のおよびゲル

マン的形態がえがかれている。ところで、この三つの共同体の形態は、ただ併列されているだけでなく、原始的・種族的紐帯の弛緩度、したがって集団的土地所有の崩壊度、私的土地所有の發展度によって、論理的に段階序列として展開されている。すなわち、『諸形態』の三つの形態は、その内容から考えて、(一)集団的土地所有、(二)私的土地所有と集団的土地所有との対立・併存、(三)私的土地所有を基礎としてその補充物としてのみ現れる集団的土地所有という形で、論理的に段階的序列としてきれいに展開されている。

だが、これは単なる論理的段階に止まらない。集団的所有を基礎とする共同体の中に私的所有が発生し、やがて集団的所有と私的所有とが併存対立するようになり、さらに、私的所有が基礎となつて集団的所有はその補充物にすぎなくなるといふ過程は、内容的にみて、土地所有と共同体の發展がたどる歴史的な發展過程とも一致するはずである。したがって、これら三つの土地所有および共同体の形態は、論理的な意味で歴史的に發展する諸段階として、統一的にならべられていると読みとることができる。

ここでさらに一步をすすめると、『諸形態』は、共同体のアジア的形態を基礎として、多くのアジア的な小共同体の上に専制君主のそびえ立ったアジア的専制国家をえがいており、また、共同体の古典古代的形態の基礎の上には、古代的都市国家をえがいている。共同体のゲルマン的形態を基礎とした国家に

ついで、『諸形態』はほとんどふれていないが、そこにも何らかの社会を考へることができる。ところで、土地所有と共同体のアジア的・古典古代的・ゲルマン的という三形態が、基本的には歴史的發展の段階とみることができるのであるから、これらの共同体を基礎として、その上に構成された、アジア的専制国家・古典古代的都市国家、およびゲルマン的共同体を基礎にした社会という三つの社会も、やはり基本的には、歴史的に序列づけられた發展の諸段階としてならべられていると読みとることができる。

ここで想起されるのは、『諸形態』の翌年一八五九年に出版されたマルクスの『経済学批判』の序文の中の、「大づかみには、アジア的・古代的・封建的および近代ブルジョア的の生産様式を、経済的社会構成の前進する諸時代と称しうる」という一節である。

ここでマルクスは、アジア的・古代的・封建的・近代ブルジョア的という四つの生産様式の支配する四つの社会構成体を、『社会的生産過程の敵対的形態』としてとらえ、しかも、これらを發展の諸段階としてならべているのである。これを『諸形態』の共同体と土地所有の三つの形態と対比すれば、『諸形態』のアジア的および古典古代的形態が、それぞれ『経済学批判』のアジア的・古代的生産様式の基礎となっていたと考へることは、まずまちがいない。そして、さらに、『経済学批判』のこの個所と、『諸形態』の「中世紀(ゲルマン時代)……」という

『資本制生産に先行する諸形態』について(四)

ような個所を考へあわせると、『諸形態』における土地所有および共同体のゲルマン的形態とは、封建的生産様式と深い関係があることがわかる。そこで、一八五七年から一八五九年度のマルクスが、アジア的・古典古代的・ゲルマン的という土地所有および共同体の諸形態を基礎にして、それぞれアジア的・古代的・封建的生産様式が段階的に生起したと考へていたとみることができるとは、いっても『諸形態』は土地所有および共同体の三つの形態についての記述であり、『経済学批判』の序文の引用個所は生産様式と社会構成体の諸形態についての記述である。生産様式や社会構成の諸形態は、たしかに共同体および土地所有の諸形態を基礎としてはいるが、共同体と生産様式とを無媒介に直ちに結びつけることはできない。しかし、この両者の関係については、ここではひとまず右のように結論しておくことにする。また、『経済学批判』のこの個所で明らかかなように、この時期にもマルクスが「アジア的生産様式」という言葉をつかい、これを古代的生産様式の前に位する「社会的生産過程の敵対的形態」の第一段階としていことがわかる。『

『古代専制国家の構造』一〇一—一四ページ参照)

以上の塩沢氏所論は、土地所有の三形態、共同体の三形態、生産様式などについての理論的に整備された把握を、それなりに示している注目すべき理解であるが、しかしまたいくつかの疑点もある。

また太田秀通氏も次のようにいう。「マルクスが、分業の發

展段階に応ずる所有形態の諸段階、生産様式の諸段階を設定したのは、世界史の上であつて、民族史の系列における諸段階としてではない。世界史の上に相互に関連しつつ相ついで出現した、この意味で継起的な、発展段階を、民族史の系列にそのまま適用することは、錯綜した交互関係の中に、自己発展の系列を見失うことから出てくる。そのため、世界史の上で先行する社会構成と、それに後続するより前進的な社会構成との関係を、直接に前者の自己発展として後者が出現したかのような誤認が生まれてくるのである」(『共同体と英雄時代の理論』三九ページ)。

塩沢氏の所説の要点は、①三つの土地所有の形態は、同時に共同体の三形態として読むことができる、②三つの共同体の形態は、集団的土地所有の弛緩度、崩壊度、私的土地所有の発展度によって論理的に段階序列として展開されている、③それは同時に土地所有と共同体がたどる歴史的發展過程と一致する、④だから三つの土地所有および共同体の形態は論理の意味で歴史的に發展する諸段階である、⑤土地所有と共同体の三形態はその上に構成された、アジア的専制国家、古典古代的都市国家およびゲルマンの共同体を基礎にした社会という歴史的發展の段階とみることができる、⑥そして、アジア的・古典古代的・ゲルマン的という土地所有の三形態を基礎にして、そのうえに、アジア的・古代的・封建的生產様式が段階的に生起したのである、⑦「アジア的生產様式」は「社会的生產過程の敵対的

形態」の第一段階である、という七点にまとめることができるが、これらの諸点についてはそれぞれ問題がある。

土地所有および共同体の三形態が、たとえばマルクスが『資本論』第一巻で展開した「価値形態ⅠからⅤへの發展」と同じような意味で、論理的かつ歴史的發展としてとらえることができるものかどうか。氏は、「この三つの共同体の形態は、ただ併列されているだけでなく、原始的・種族的紐帯の弛緩度、したがって集団的土地所有の崩壊度、私的土地所有の發展度によって、論理的に段階序列として展開させられている」とのべているが、まず第一に、共同体の三形態は原始的・種族的紐帯の弛緩度というよりは、この三形態がいずれもその基礎に種族的氏族的所有を置きながらも、それぞれ、種族の一員としての生産者が自分のものとしての生産条件(土地)と特徴のある結合の仕方をしているとみるべきで、もしただ弛緩というなら、アジア的共同体の弛緩度が弱くなれば古典古代的共同体に、さらにそれが弱くなればゲルマン的共同体になる、という見方に通じてしまう。それ故それぞれの特異性による区別というべきであろう。そして、この特殊性によって、弛緩度がみられたというべきであろう。逆ではない。また、この私的所有の發展度によって、論理的に段階序列として展開されているという点も、すでにみたように、マルクスが第二形態では「私的所有」といつており、第三形態では「個別的所有」として両者を区別している点からも、単なる私的所有の發展度による段階的

説明でないことは明らかである。

しかし、塩沢氏は、まえにふれたごとく、第二期は「マウラーの著作は読んでいるが、まだモルガンの『古代社会』は読んでいない時期」であるとし、この時期のもっとも重要な文献は、マルクスの『資本論』とエンゲルスの『反デューリング論』であると、とくに『資本論』をとりあげて、次のようにいわれる。

『資本論』の中にも、資本制以前の諸社会に関する分析は随所にみられる。この断片的な記述の中から、次のような諸点を明らかにすることができる。

共同体の諸形態およびこれを基礎とする生産様式の歴史的發展段階として、アジア的・古代的（ギリシャ・ローマ的）・封建的という三つの生産様式を資本制以前にみとめている。ここで注意すべきことは、第一に、『資本論』においてもこれらの三形態が類型としてではなく、段階的、継起的なものとされていることであり、第二には、『資本論』でも、古代的・封建的・生産様式とならんで、アジア的・生産様式をおいているということである。その例証として次の四個所を指摘する。

(1) 「ローマのおよびゲルマン的な私的所有の種々の原型は、インド的な共同所有の種々の形態から導き出される」（一巻一章、第二版「一八七三」への註、長谷部訳、日本評論社版第一分冊二六四頁）。

(2) 「古代アジア的・古代的（ギリシャおよびローマ的）等々

『資本制生産に先行する諸形態』について（四）

の諸生産様式においては、生産物の商品への転化は……一の従属的な役割を演ずる」（一巻一章、長谷部訳、日本評論社版、第一分冊二六七頁）。

(3) 「小規模農民経済と独立手工業経営とは、一方では封建的・生産様式の土台をなし、他方では該生産様式の解体後に、資本制経営と相並んで現われるのであるが、それらは同時に、本源的な東洋的共同所有が解消した後の、そして奴隷制がまだ生産を真実に征服しない前の最盛期における古典的共同体の経済的基礎をなす」（一巻二章、註三四、長谷部訳第三分冊四七頁）。

(4) 資本主義社会以前の協業について論ずるにあたって、「人類分化の初期——狩猟民族のもとで、また恐らくインド的共同体の農業——支配的に見出されるような労働過程における協業は、一方では生産諸条件の共有に基づき、他方では個人の個人が……まだ種族または共同体との臍帯からはなれていないことに基いている。……古代世界、中世および近代の植民地における大規模な協業の散在的利用は直接的な支配および隷属諸関係に——大低は奴隷制に——基いている」（一巻一章、前掲訳、四六頁）

したがってマルクスが、共同体と生産様式の諸形態を、類型としてではなく、継起的なものとしてとらえていることは明らかである。（前掲書二二—二四ページ参照）

なお本田喜代治氏は『パンセ』一一四号（一九六四年四月）所

『資本制生産に先行する諸形態』について(四)

三二四

載ゴドリエの作成した文献目録のプランに従って、マルクス・エンゲルスの著書、論文、手紙類の邦訳文献のなから抜粋したものを、前掲書『アジア的生産様式の問題』の第三部として掲載しているが、そこでの『資本論』からの抜粋として氏が紹介されているのは、ホブズボームの(2)、(3)、(4)の引用のほかに次の個所であった(該箇所を本田氏の使用されている岩波文庫版で示す)。

(1) 「未分割の共同所有、共同労働、およびそれらの解体諸形態」

「共同的なる、即ち直接に社会的となつてゐる労働を考察するために、我々はその自然的な形態、即ち、すべての文化民族の歴史の入口で我々が出会うような形態に帰る必要はない。

……しかしながら、継続時間によって測定される個人的労働力の支出は、ここでは本来労働自身の社会的規定として現われる。というものは個人的労働力は、本来家族の共同の労働力の器官としてのみ作用するからである」(岩波文庫版『資本論』(一) 五一―五二ページ)。

(2) 「アジアでは地代は現物で支払われ、それが主要な貢租である」

「商品生産が或る程度の高さと広さに達すると、貨幣の支払手段としての機能は、商品流通の部面を超える。……ヨーロッパによって強制されて開かれた日本における外国貿易が、現物地代の貨幣地代への転化を結果するとすれば、それは、その模

範的な農業の破滅である。その狭い経済的存立条件は解消されるであろう」(同上二六六―二六七ページ)。

(3) 「労働における諸個人の単純協業はアジア文明の巨大な公共事業を説明する」

「単純な協業の効果は、古代のアジア人、エジプト人、エトルリア人、等々の巨大工事にりっぱに示されている。……アジア及びエジプトの諸王やエトルリアの神政者等のこの権力は、近世社会にあつては資本家の手に移つた。彼が単独資本家として登場するか、或いは、株式会社における如く、結合資本家として登場するかにはかわりなく」(同上四四―四五ページ)。

(4) 「インドの世襲カストにおける職業の石化(身分と職業の一体化)」

「工場手工業が実際に細分労働者の練達を生産するのは、すでに社会に存在していた工業の自然発生的分化を作業場の内部で再生産し、それを組織的に極端まで進めることによるのである。……インドの織物匠は、大多数の工場手工業労働者に比すれば、非常に複雑な労働を行うのである」(同上五四―五五ページ)。

(5) 「アジア的生産様式の基礎をなす自給自足的な村落共同体。それと国家との関係。アジア社会の不易性を解く鍵」

「部分的には今日なお存続しているインドの太古的な小共同体は、土地の共有と、農業と手工業との直接的結合と、新たな共同体の設立に当って既定の計画及び設計図として役立つ固定

した分業とに、基礎を置いている。……社会の経済的基本要素の構造は、政治的雲上界の風によっては影響されることなく保たれているのである」(同上八三—八五ページ)。

(6) 「模範的産業国家としての古代エジプト」

「古典的古代の著述家たちはもっぱら質と使用価値とを固執する。……プラトンの共和国は、そこで分業が国家の形成原理として展開される限りでは、エジプトの身分制度のアテナイ人の理想化に過ぎないが、エジプトは彼と同時代の他の人々、たとえばソクラテスなどにとっても産業上の模範国なのであり、またローマ帝政時代のギリシア人にとってさえもなおかような意義を失っていないかった」(同上九六—九七ページ)。

(7) 「労働生産性と自然諸条件。およびエジプト、インド、ペルシアにおける灌漑の意義」

「社会的生産が、より多く発展した内容をもつか、より広く発展した態容をもつかは別として、とにかく、労働の生産性は諸種の自然条件に結びつけられている。……アラビア人の支配下におけるスペイン及びシチリアの産業繁栄の秘密は、運河の開設だった」(同上三四二—三四四ページ)。

(本田喜代治『アジアの生産様式の問題』一二六—一三六ページ)

だが、以上の塩沢氏およびゴドリエの『資本論』からの引用箇所を読み返したとしても、それによって、塩沢氏が指摘されているように、三形態が類型ではなく、段階的、継起的である、という点が明示されているということではできない。もっと

『資本制生産に先行する諸形態』について(四)

も、類型というばあいも、段階というばあいも、それらのことばがどのような内容をもつものとして使用されているかを明らかにしなければならぬであろう。段階的、継起的というばあい、ふつうAからBへ、BからCへという過程をへることであり、A↓B↓Cということである。これに対し、類型というばあいは、A、B、Cとそれぞれの質的差異にもとづいて並列される。もしこのような意味でなら、共同体の諸形態およびこれを基礎とする生産様式は、段階的でもあり類型的でもある。それらは世界史のうえで地球上に継起的に発生しては消えて行くと同時に、世界史のうえで類型的に並存しているからである。

この意味で太田氏が、継起的発展段階と並存的類型の問題として以下のようにのべていることに賛成である。

「形而上学的な静的な世界観に対して、マルクスやエンゲルスがアンティテーゼとして出してきた動的な見方の根本は、前進的継起関係を迎る発展的な方法に他ならなかった。それはマルクス・エンゲルスにとって本質的な意味をもつ考え方であった。経済的社会構成(Oekonomische Gesellschaftsformation)の前進的諸時代も、分業の発展段階に対応する所有形態の段階も、共同体的土地所有の諸段階も、世界史の上につぎつぎと出現した新たな段階としてのべられている。一体、並存関係と継起関係との関係は、あれかこれかの関係ではない。並存関係は直接的な現象形態として存在する。科学はこの関係に歴史的位相を見出し、並存関係の中に継起的発展関係をつぎとめる。継

起関係とは要するに段階関係である。ただ問題は、共同体の三形態を、すべての民族が通過すべき発展段階だと主張する時に出てくるだけである。マルクスはもとよりそのような公式を歴史におしつけはしなかった(『太田秀通』『共同体と英雄時代の理論』三四ページ)。

「三つの社会構成をつぎつぎに経過して資本主義に移行した民族ないし国家は、世界史の上に存在したことがないのである。世界史における発展段階を、すべての民族の歴史に原理的に妥当するものと考え、たちまち史実との不適合につきあたる」(同上三五ページ)。

「紛糾の中心が、世界史の発展段階と民族史のそれとの関連と差別が正しく捉えられず、発展段階といえはすべての民族に妥当すると考えたり、継起的といえはすべての民族にあてはめようとしていると憤ったりすることにあらはれることは明らかである。並存関係の中に継起関係を見るときは、総じて諸現象を發展の諸段階として位置づける、ということであって、それを同じ系列に属する一連の自己發展の諸形態と見る、ということではない」(同上三六ページ)。

この点について、ホブズボームは次のようにのべている。「大づかみにいって、ここで原始共同体体制から發展して行く三つないし四つの、どれを選んでもよい道があることになる。それぞれが既存の、あるいは約束されている社会的分業形態に対応する道である。すなわち東洋的、古代的、ゲルマン的(た

だし、マルクスがこれを特定の人民に限らなかつたことはいうまでもない)およびスラヴ的形態がこれである。スラヴ的形態は、あまり明確には描かれておらず、またくわしくは述べられないが、東洋的形態と親近性をもつものである。これら諸形態の間の一つの重要な区別は、それが歴史的發展に抵抗的な体制か、それとも積極的なものかという、歴史的にきわめて重大な区別である。一八四五―一八五六年のモデルでは、この問題にはほとんどふれていない。……マルクスは歴史的發展をけつして単純に単線的なものとは見ていなかったし、また単純に進歩の記録にすぎないものとも考えていなかった。しかしながら、一八五七―一八五八年になると、その議論にはいちじるしい前進の跡が見られるのである」(『共同体の経済構造』三五ページ)。

四 過渡期の国家について

「『諸形態』の共同体と『ドイツ・イデオロギー』の共同体」でみたごとく、太田秀氏は『ドイツ・イデオロギー』では分業の発展段階に対応する所有形態の発展段階が考察されていると同時に、支配階級の連合形式が問題とされているのとべていたのであるが、ということは、所有の三形態のそれぞれの段階において、国家の存在を認めるといふことにほかならない。『ドイツ・イデオロギー』の論旨からみると、そう理解できる。しかし『諸形態』の論旨からみれば『支配階級の連合形式』という点からのみ国家を問題とすることはできない。というの

は、そこでは、本源的所有の三つの形態の前提となつてゐる共同体は、それぞれ種族共同体であり、自分のものとしての生産諸条件に労働を通して関係してゐる労働する諸個人の共同体であつて、搾取関係を共同体内部にもつてはいない。『諸形態』では、搾取関係の発生、つまり奴隷や農奴が発生すると、そこでの所有は本源的でなく二次的となる、としてゐるのである。だから「国家とは階級抑圧の装置」であると見る観点からは、『諸形態』での本源的所有の三形態のもとは、国家は存在しない筈なのである。そして、奴隷制社会や封建社会および資本制社会では、これらが階級社会であるがゆゑに国家が存在することは自明である。国家「階級抑圧装置説からすればそのようなのである。しかし、『諸形態』でも、本源的所有の三形態のもとの国家についてマルクスはのべてゐる。とくに第二形態については「国家としての共同体」とマルクスが表現してゐるのであつて、この点についてはさきの註(13)でもふれたが、太田秀通氏はこの表現が『諸形態』において「古典古代的共同体においてのみ使われている」と指摘し、そして「このことは、そうでなければならぬ理由がある」として、次のような解釈を示される。

第一に、古典古代的共同体は、労働とその物質的前提の統一の形態であり、共同体の成員は、self-sustaining peasants としてとらえられてゐる。これは、歴史的にみて、原則として正しい。スバルタ人の場合は例外として、古典古代的共同体成

『資本制生産に先行する諸形態』について(四)

員の中核的部分は、クレーロス所有農民であり、奴隷を助手として自ら耕牛を駆る労働人であつた。ポリスは、こうした市民を中核とする農業市民共同体であつた。そして、この共同体が、そのまま、同時に、独立した存在であり、自らの法をもつて秩序づけ、貨幣鑄造権をもち、固有の国制をもつところの国家機構であつたのであり、それが総体として、自己の共同体と生産条件とから分離された奴隷身分に対立する市民の連合形式であつたのである。したがつて、ここでは、共同体成員の相互関係を表示する評議会・民会・裁判制度等々は、ただちに国家機関であつたのであり、このような場合にのみ国家としての「共同体」という表現は妥当であるにすぎない」(前掲『歴史評論』一七七号、一九六五年五月、一二一—三ページ)。

ここでも奴隷身分に対立する市民の連合形式という点から国家としての共同体といわれているのである。

しかし、マルクスの見解はそうではない。ローマ的所有での共同体は、外敵から土地を守り、共同体を存続させるための、自由平等な私的所有である分割地農民たちの結合体として国家なのである。家族は軍事組織に編成されて都市に集中するのであつて、農民の定住地としての都市が共同体の中心となるのである。マルクスは国家「階級抑圧装置説に立つことなく——といつても国家「階級抑圧装置説はならぬ誤りでないことはいうまでもないが——、『諸形態』では本源的所有のもとでも共同体が国家的機能をもつことを認めてゐるのである。それは「共

同体の本性から生ずる共同事務の遂行」という機能であり、宗教的行事も含まれるのである。この観点は、国家が支配階級による被支配階級抑圧の装置であるという理解からは受け入れられないであろう。だから、太田氏は「共同体のなすべき機能を吸いあげた国家というだけでは、国家としての共同体でもないし、共同体としての国家でもない。すくなくともそう呼ぶにはふさわしくない」として次のようにいう。「共同体の成員とは、その積極的な、その共同体を分有する構成員のことであって、体制としての共同体に含まれるすべての因子、たとえば、奴隷やメトイコイやペリオイコイなどは共同体たる国家の成員ではない。オリエントの専制国家体制下の共同体の成員は、ならんら国家権力の分有者ではない。この場合には、『国家としての共同体』という概念はあてはまらない。デスポティズムの国家機構の構成の仕方、すなわち、支配階級の連合の基礎にあつたはずの *Gemeinwesen* は、直接生産者の生産構造としての *Gemeinde* とは直接に一致するものではなかつた。 *Gemeinde als Staat* を古典古代的共同体にかぎって使つたマルクスは、こうした歴史の事情をふまえていたのであり、『ドイツ・イデオロギー』における所有形態の第二段階が *das antike Gemeindegut- und Staatseigentum* と規定されていることは、それだけの理由があるのである。 *und* は、この場合、共同体と国家との同一関係を表現するものである。『国家的共同体』という表現は、それが表示しようとする概念内容と、この言葉のもつ意味

との間に開きがあるために、明晰にして判明なる概念とはいひがたい。わたくしは、マルクス学者ではないが、日本史研究者の間に、あるいは党・惣を古典古代的共同体に比定し、あるいは律令制下の口分田をクレーロスに比定する、といった混乱があらたにつくりだされている状況のなかでは、彼らの概念を内容的に明確にし、それを方法として適用することに誤りのないようになしおかなければならない、と考へないわけにはいかなかつたのである」（同上二三ページ）。

しかし、氏の見解には、過渡期の国家として、国家が必ずしも階級抑圧の装置ではない、という視点が欠けている。過渡期の国家としては、たとえば中華人民共和国とか、朝鮮民主主義人民共和国とかが、国家でありながら、階級抑圧の装置ではないこと、過渡期の国家として、国家消滅のための過渡的役割を担うものであること、この点是否定できないであろう。すなわち、過渡期の国家は、国家成立の過渡期と、国家消滅の過渡期とに成立する。

原始共同社会↓過渡的社会↓階級社会（奴隷制社会、封建社会、資本主義社会）↓過渡的社会↓科学的社会と云う人類の発展段階こそ一般的である。ただし、これは人類の、あるいは世界史の発展法則であつて、個々の民族、社会、国家の必然的に経過せねばならない発展段階ではない。この点はホブズボームや太田秀通氏の強調されている通りである。

ここで想起されるのは、「支配」隷属関係は、二筋の道へ

て発生した」というエンゲルスの指摘である。エンゲルスは、『オイゲン・デューリング氏の科学の変革(反デューリング)』 Herrn Eugen Dührings Umwälzung des Wissenschaft (Anti-Dühring) (一八七八年)の第二篇第四章「強力論」(むすむ) Gewalttheorie (Schluss) で、次のように詳論している。

まずエンゲルスは「人類はまず動物界——せまい意味での——からぬけだして歴史に足をふみ入れたのであるが、そのときにはまだなかなば動物であつて、粗野で、自然の諸力にたいしてまだ無力であり、自分自身の諸力についてまだ無知であつた。だから動物と同様にまずしく、動物とほとんどおなじぐらいの生産的である。生活状態のある一定の平等が支配的であり、族長にたいしても社会的地位の一種の平等が支配的であるか、あるいはすくなくとも社会的諸階級が欠けていることが支配的である。この社会諸階級が欠けていることは、その後の文化諸民族の自然発生的農業的共同体においてもなお存続している。このような共同体にはすべて、そもそものはじめから、たとい社会全体の監視をうけてはいるにしても、その保護をば個人にまかせなければならぬような、一定の共同の利害が存在する。それはつまり、紛争の裁決、個人々人による他人の権利への侵害の阻止、水利の管理、ことにあつた地方でのそれ、そして最後に、まったくの原始的な生活状態では宗教的職能である。このような職務をおびた個人々は、いつの時代の自然発生的の共同体にも、たとえばドイツ最古のマルク共同体にも、こんにち

のインドにも、みいだされる。いうまでもなく、これらの人々は、ある一定の絶対権をあたえられているもので、国家権力の端初をなしている」(『マルクス・エンゲルス選集』一四卷三二五ページ)と指摘する。

ここに「国家権力の端初」が無階級社会において発生していることがのべられている。ここで特定の個人に与えられた絶対権は、階級社会の支配階級の頂点に立つ君主の絶対権とはその性質を異にしている。ではこのような搾取性のない個人が反対物に転化するものは、どうしてか。その根因は生産力の増大にある。エンゲルスはいう。「しだいに生産諸力が増大すると、ここでより稠密となった人口は、個々の共同体のあいだに、ここでは共同であるがかしこでは敵対的である、といったような利害關係をつくりだし、これらの共同体があつたより大きな群全体を組成することによって、さらにまた一つのあたらしい分業、すなわち共同の利害を保護するための、敵対的な利害を防止するための、機関を創設することがおこってくる。すでに群全体の共同の利害の代表者として、個々の共同体にたいしてある特殊な地位を、場合によってはむしろ敵対的な地位をしめるこれらの機関は、やがて、ときには、すべてが自然発生的におこる世界ではほとんど当然のことである職務執行の世襲化がおこなわれることによって、またときには、他の諸群との衝突が増加するにつれてこのような機関がますます必要欠くべからざるものとなることによって、なおいっそう独立的

なものとなる。どのようにして、社会にたいする社会的職能のこのような独立化が、時とともに社会にたいする支配にまでたかまることができたか、どのようにして、最初には奉仕者であったものが好機をつかんでだんだんと主人公に転化したか、どのようにして、この主人が事情におうじて、東洋の専制君主または太守として、ギリシャの族長として、ケルト人の族長等々としてあらわれたか、どの程度まで、彼はこの転化のさいに強い強力を利用したか、どのようにして、最後に一人一人の支配者たちが一つの支配階級にまで結合したか——こういったことには、ここでたしめる必要はない。ここで問題なのは、ただどこでも社会的な職務執行が政治的支配の基礎となったということ、そして、政治的支配はまた、それがこの社会的な職務執行を遂行した場合にかぎってひきつづき存続したということ、を、確認することである。どれだけ多くの専制政府がペルシャやインドで興亡したとしても、そのどれをとってみても、自身の任務がなによりもまず農業にとってまったく欠くことのできない河川流域灌漑の総担当者になることだ、ということを知りぬいていた」(同上三二五—六ページ)。

つまり、エンゲルスは、

(1) 人類は動物界からぬけた当初は半ば動物的であり、動物とほとんど同様に不生産的であった。

(2) 生活状態が一定の平等を保っており、社会的階級が欠けている。

(3) このような共同体では、共同的利益の代表と宗教的職能をおびた個人が絶対権を与えられ、国家権力の端初をつくる。

(4) 生産諸力の増大によって、ここでは共同体的であるが、ここでは敵対的な利害関係をつくりだす。

(5) そこで一つの新しい分業、共同的利益を守り、敵対的利害を防止するための機関をつくりだす。

(6) この職務の世襲化と独占化が進む。

(7) 最初は奉仕者であったものが主人公(東洋の専制君主等)へ転化する。

(8) しかし、社会的職務遂行がつねに政治的支配の基礎をなしている。

の諸点を指摘し、ここに支配∥隷属関係発生の第一の道があることを明らかにしているのである。もちろん支配∥隷属関係の成立そのものは、国家の成立そのものではないが、しかし、支配階級の成立のためには、その前提として支配∥隷属関係の成立が前提となっていなければならない。したがって支配∥隷属関係の成立の道は、国家成立の道でもある。

そしてこの支配∥隷属関係発生第一の道が「職務の世襲化と独占化」であり、たとえば、ゲール人のもとでは、農耕、牧畜、手工業の社会的分業の発展にともななって、氏族長たちは、彼らの名義的所有権を私的所有権に転化し、いわゆる「土地の清掃」(clearing of estates)が行われたのである。

では第二の道とは何か。エンゲルスは続けていう。

「このような階級形成とならんで、なおもう一つの階級形成がおこなわれた。農耕家族の内部での自然発生的な分業により、ある一定の繁栄段階で、一人またはそれ以上の他人の労働力を結合させることが可能となった。このことはことに、旧来の土地共有がとくに崩壊したか、またはすくなくとも旧来の共同耕作が個々の家族による分割地の個別的耕作にとつてかわられた地方でみられた。生産はいちじるしく発展し、その結果として人間の労働力は、もはや自分の扶養に必要以上のものを生産できるようになった。より多くの労働力を扶養する手段が存在するようになったし、これらの労働力をはたらかせる手段も存在するようになった。労働力はある価値をえたのである。しかし、はたらかせることができるよぶんな労働力というのは、自分の共同体でも、それがぞくする共同体群でも、これを供給することができなかつた。これに反して、これを供給したのは、戦争である。戦争というものは多くの共同体群が同時にとなりあつて存在しはじめたとき以来あつたのである。これまでは戦争の捕虜をどうしたらよいのかわからなかつたので、これらの捕虜は撲殺されただけであつた。もっと以前には喰われたのである。ところが、現在到達した『経済状態』の段階では、これらの捕虜はある価値をもつた。そこでこれを生かしておいてその労働を利用することになった。こうして強力は、経済状態を支配するところか、反対に経済状態へ強制的に奉仕させられたのである。奴隷制が発明された。それはやがて、旧来

『資本制生産に先行する諸形態』について(四)

の共同体の状態をこえて発展したいっさいの民族のところで支配的な生産形態となつたが、しかしまたけつきよくこれらの民族の崩壊の主要な原因ともなつた。奴隷制によつてはじめて、農業と工業とのあいだの大規模な分業が可能となり、さらにこれによつてまた、古代世界の花であるギリシャ文明が可能となつた。奴隷制がなければ、ギリシャ国家もなく、ギリシャの芸術も科学もなかつた。奴隷制がなければ、ローマ帝国もなかつた。だがまた、ギリシャ文明とローマ帝国との基礎がなければ、近代のヨーロッパもなかつた。吾々がけつしてわすれてはならないことは、吾々の経済的・政治的・知的発展全体が、奴隷制をば必然的な一般的なものとみとめた状態を前提とする、ということである。こういう意味で、古代の奴隷制がなければ、近代の社会主義もないといつても不当ではない(同上三二七―八ページ)。

ここに「生産力の発展」が「剰余生産物の生産」を招来し、「剰余生産物搾取」の物質的基礎をつくりだしたこと、「奴隷制の発見」は歴史的必然であり、それ自身、人類進化の必然的一環であつて、それは、自由、平等、博愛の原始共同社会からの退歩ではなかつたことが、のべられている。

人類の発展は、非理性的な、利己的人間性によつて歪められたものである、というペシシズムにたいしてエンゲルスはさらに続けて次のようにのべている。

「一般的なおざなり文句で奴隷制やこれと同様なものを罵倒

したり、このようなはずべき制度に高遠な道徳的憤怒をぶちまけたりするのは、いとまたやすいことである。残念ながら、ただそれだけでは、だれでもが知っていること、つまり、これらの古代の制度が、吾々のこんにちの状態とも、またこの状態によつて決定される吾々の感情とも、もはや一致するものではないということより以上には、なにもいいあらわすことができない。ところが、それだけでは、この制度がどのようにして発生したか、なぜそれが存続したか、また歴史上でそれがどんな役割を演じたか、ということについては、一言も知ることができないのである。そしてもしもこれらの点にたちいるならば、吾々は、吾々のことがどんなに矛盾だらけの、またどんなに異端的なものにきこえようとも、奴隷制の実施は当時の事情のもとでは一大進歩であつた、といわなければならぬ。人類は動物からはじまったものであり、したがつてまた、野蛮状態から脱出するためには野蛮的な、ほとんど動物的な手段を必要とした、ということは何と云つても一個の事実である。ふるい共同体は、それが存続したところでは、数千年このかた、インドからロシアにいたるまで、もっとも未熟な国家形態たる東洋の専制政治の基礎となつてゐる。ただ共同体が分解したところにかぎつて、諸民族はみづから前進したのであつて、彼らのもつとも手ちかな経済上の進歩は奴隷労働による生産の増加と発達とであつた。人間の労働がまだたいして生産的でなく、そのために必要な生活資料以上にはきわめてわずかな剰余しか提供し

なかつたあいだは、生産諸力の増大、交易の拡張、国家と法との発達、芸術と科学との創始は、分業の発達のおかげで、はじめて可能となつたのであり、しかもこの分業の発達は、単純な手工労働に従事する大衆と、労働の指導や商業や公務や、のちには芸術ならびに科学上の職業に従事する少数の特権者とのあいだの大きな分業を基礎として、そのうえに立脚しなければならなかつたということは明白である。この分業のもつとも簡単な自然発生的な形態が、まさに奴隷制だったのである。古代世界の、ことにギリシャ的世界の歴史的諸前提条件のもとでは、階級対立を基礎とする社会への進歩は、ただ奴隷制の形態をとつてはじめておこなわれることができた。奴隷にとつてさえも、これは一つの進歩であつた。奴隷の大衆は戦争の捕虜から補充されたが、彼らには以前には虐殺され、それよりもつとまえには焼肉にさえされたのに、いまではすくなくとも生命だけにとりとめたのである。

この機会につけかわえていえば、搾取階級と被搾取階級の、支配階級と被抑圧階級との、従来の一っさいの歴史的対立は、人間労働の生産性のこのおなじ相対的未発達ということによつて説明されるのである」(同上三二八―九ページ)。

すなわち、エンゲルスはここで、

(1)自然発生的分業により、他人の労働力結合が可能となる。

このことは共同耕作が分割地の個別耕作にとつてかわられたところでみられた。

(2)そこでは労働力はある余剰を生み出すようになった。

(3)そして、より多くの労働力を供給できたものは戦争であった。戦争により捕虜を獲得し、奴隷制がつくりだされた。

(4)奴隷制によって商業と工業との分業がはじめて可能となり、ギリシャの文明、国家、芸術、科学も可能となった。

などを説明しているのであって、ここに、この奴隷所有者という搾取階級による国家の形成という第二の道があることがのべられているのである。

マルクスはこの二つの内容が専制国家の機能に含まれている点について次のようにのべている。「専制国家において、政府の行う監督および全面的干渉の労働が、二つのもの——あらゆる共同体の本性から生ずる共同事務の遂行、ならびに、政府と人民大衆との対立から生ずる独自の機能——を含むのと同じである」(『資本論』、青木文庫、五四五ページ)。

だから、アジアの専制国家は国家権力の始まりであり、もっとも粗野な国家形態である。このアジアにおける国家について、マルクスは有名な「国家最高地主説」をのべている。

「土地所有者たると同時に主権者たるものとして彼等に直接に対応するものが、私的土地所有者でなくアジアのように国家だとすれば、地代と租税とは一致する。というよりはむしろ、そうした場合には、この地代形態と異なる租税なるものは実存しない。こうした事情のもとでは、従属関係は、政治的にも経済的にも、この国家にたいする凡ゆる隷従関係に共通なもの

の以上に苛酷な形態をとる必要はない。国家がこのばあい最高の地主である。主権なるものはこのばあい、国民的規模で集積された土地所有である。だがその場合には、かかる土地所有にかわる私的土地所有なるものは実存しない、——といっても土地の私的ならびに共同的な占有および利益は実存するのだが」(同上(四)一一四ページ)。

こうして、「国家とは支配階級による被支配階級抑圧の装置である」という規定は正しいのだが、国家成立の二つの道なのかの第一の道からみてもわかるように、過渡期の国家は右の規定だけでは説明できないことは明らかであろう。

五 アジアの生産様式は「社会的生産過程の敵対的形態か」——総体奴隷制は階級社会か——

「一九五七年度歴史学研究会大会報告『アジアの生産様式と日本古代国家』以来、世界の基本法則を明らかにするという立場からいち早くアジアの生産様式を原始共同社会につづく世界史の普遍的な一段階として措定すべきことを主張してきた塩沢君夫氏」(原秀三郎「アジアの生産様式論批判序説」『歴史評論』二二八号、一九六九年八月、九一—一〇ページ)は、すでにみたように、アジアの生産様式を「アジアの共同体を基礎とする最初の階級社会として、古代奴隷制的生産様式に先行する独立の生産様式」であり、「社会的生産過程の敵対的形態」の第一段階であるとみなしていた。つまり、「アジアの生産様式＝階級社会」

『資本制生産に先行する諸形態』について(四)

説である。日本ではこのアジア的生産様式を奴隷制社会とする説は、一時定説の観があった。たとえば、原氏の指摘しているように、吉田晶氏も太田秀通氏も、さらに手島正毅氏や福富正実氏らも、みなこの点では共通の理解を示している。また、旧版の大阪市立大学経済研究所編『経済学小辞典』(岩波書店、昭和二六年)の「アジア的生産様式」の項目(執筆者岡本三郎氏)もそうである。岡本氏は、「アジア的生産様式は原始共有社会そのものだとか、封建主義のアジアの変種(現代中国に対する規定ではない)だとか、無階級社会から階級社会への過渡的段階としての農業共同体であるとか、また上代の東洋にあっては奴隷制の特殊な変態、中世の東洋にあっては封建制の変態を意味するとか、さまざまの説が出た」が、「ソヴェートの歴史学界はこれら豊富な資料にもとづいて批判および自己批判し、アジア的生産様式とは奴隷制の特殊な形態であり、古代東方においては奴隷制社会が最も初期の形態において、したがってまた共有の諸関係の多大の固定性と債務奴隷制の広汎な発達を前提とする原始的な形態において、発生したものであることを明らかにした」とのべ、つづけて、「ところが一九三九年、ソヴェートにおいてマルクスの遺稿『資本制生産に先行する諸形態』が発表されるに及び、アジア的生産様式の問題は総決算への基本的方向が明示され、原則上の論争は一応終止符が打たれるとともに、ソヴェート歴史家の見解の正しかったことも証明されるにいたった」とのべている。つまり「債務奴隷制の広汎な発達」

を前提とする搾取社会を想定しているのである。このような理解は、『諸形態』の論旨からみて大きな誤りである。

また最近でも林直道氏は、「アジア的形態のもとでは、奴隷制はきわめて特殊な形であらわれた。直接的生産者の圧倒的多数は、その古巣である共同体から抜け出ることにはなかった。また『アジア的形態の基礎となつてゐる工業と農業との自給自足的一体性のもとでは、征服ということとは、土地所有、農業が排他的に優勢なところほどに必須の条件とは《なら》ない。』。こういう状況のもとでは、人間自身が生産条件の一部として家畜なみに扱われる典型的な奴隷の形態は十分に発展することはできなかつた。しかしそのことはアジアでは奴隷制的関係が存在しなかつたことを意味しない。『この形態では個々人はけつして所有者とはならず、ただ占有者となるにすぎないから、けつぎよく彼自身が、共同体の統一を具現する者の財産、奴隷である』(『経済学批判要綱』Ⅲ四二七ページ)。

このように、共同体が不変のまま維持され、共同体成員がそつくりそのまま、奴隷としての意義をもつにいたつた構造を、マルクスは『東洋の総体的奴隷制』(同四三〇ページ)と名づけている。

さらに非生産者・搾取階級による土地所有の成立過程の点でもアジア的形態は特殊性をもつていた。ギリシャやローマでは、公有地は共同体成員の私的所有地と区別され対立した形で存在した。貴族はこれをわが物とした。だから自由民⇨小農民の私

的土地所有と相ならんで貴族の私的土地所有が出現することになった。これにたいしてアジアでは、私的所有が存在せず、共同体所有が唯一の所有として全土地を蔽っていた。だからこれを横領した王の土地所有は、私的土地所有ではなくて、国全体をおおう『國家的所有』という形態をとったわけである。ここにも総体的奴隷制の一要因があった」（『史的唯物論と経済学』上巻、大月書店、一九七一年五月、一三〇—一三一ページ）とのべている。

右の林氏の見解にも重要な点での誤解が含まれている。すなわち、「共同体所有を横領した王の土地所有」と氏はのべているが、所有のアジア的形態は、横領とはまったく関係がない。横領はむしろこのアジア的形態の崩壊を示すものである。が、いずれにしても、林氏の理解もアジア的生産様式を敵対的形態と認めている。しかし、これらの解釈は正しくない。どのよう

に正しくないか。以下、「アジア的生産様式を社会的生産過程の敵対的形態」の第一段階とみる解釈に対する有力な反論である原秀三郎氏の所説を手がかりとして問題を検討しよう。

(一) 原秀三郎氏の塩沢説批判

芝原拓自氏の「先駆的な業績」にもとづく原氏の「カテゴリー」としてのアジア的生産様式とは、マルクスにおいては、本源的所有に対応するいわゆる原始共同社会⇨無階級社会を総括す

『資本制生産に先行する諸形態』について（四）

るものである」（『アジア的生産様式論批判序説』『歴史評論』一九六九年八月号一四ページ）という積極的見解は、次のように展開される。

① 原氏による「諸形態」の理論的構成」の把握

まず原氏は、「アジア的生産様式」をマルクス・エンゲルスの著作に即して、論理的、実証的に解明しなければならぬ」（同書）として、このばあい「方法的には、芝原拓自氏が提唱した、理論の適用と論理的吸収の前提となるべき『理論的理解・論理段階⇨抽象上の位置の確定』（『前資本制分析の方法に関する覚書——（A）とくに『諸形態』の理解について——』）《新しい歴史学のために》五二号・一九五九年五月）ということが、第一義的に重視されなければならない」（同上二四—二五ページ）という。

すなわち、原氏は「カテゴリー」としてのアジア的生産様式の論理的・実証的解明は、まず第一に、アジア的生産様式の敵対的性格を確定する上で、決定的な論拠を提供してきた「諸形態」について、それが明らかにした理論的理解と、諸概念の論理段階⇨抽象上の位置の確定をおこない、ついでカテゴリーとしてのアジア的生産様式が、マルクス・エンゲルスによつていかなるものとして指定され、またいかに内容的に豊富化されていったかについて論ずること」（同上二五ページ）が必要であ

る、といわれる。この点について、原氏は芝原氏の「一般に、マルクス主義学説史の研究ではなく、終極において理論と現実との接触を課題とする以上、前資本主義社会に関するマルクスの諸見解の整理の方法は、その著作の年代別整理を主要基準とすべきではなくて、著作の目的・抽象段階の諸制約の確定から出発すべきである。これは絶対に必要ない第一義的な手続である」(『新しい歴史学のために』五二号二ページ)とのべている箇所を引用し、「従来は、このことが軽視ないしは無視」されていたとし、一例として、塩沢君夫氏の所説をとりあげ、塩沢氏に特徴的にみられるように、マルクスの「アジア的生産様式概念の成立と発展」を「年代的に追跡する方法」が一義的にとられていた、とのべる。そしてこのような方法によるかぎり、「諸形態」は、マルクスがまだモルガンやマウラーの著作を読む前のものであって、さわめて乏しい資料によって書いたものであり、マルクスにとって、その後の研究のための論理的見通し程度のものにすぎなかったのではないかと思われる。もちろん、基本的な点では、『諸形態』の見解は決してあやまってはいなかったのであって、ここに示された論理は、最後までつらぬかれていたのであるが、個々の点では、理論的にも実証的にも、まだ完成されたものとはいえないのである」(『古代専制国家の構造』八ページ)ということになってしまう、とのべている。

すなわち、塩沢氏にみられるような右の考え方によれば、マルクスの見解を知るためには、『諸形態』よりも『資本論』

以後の文献をより多く重視し、『諸形態』とそのこの文献とで、ちがった表現をしているような場合には、『諸形態』の方をとるべきではないということになってしまう、と指摘する。

しかし、右のような塩沢氏の考えは、「この『論理段階』『抽象的位置の確定』という第一義的な視角を欠落した、『層位年代学』的ともいべき方法」(『歴史評論』一九六九年八月号一五ページ)であって、このような理解の仕方は二次的・補足的意味しかもち得ないであろう、と原氏はいう。

こうして、原氏によればまず「諸形態」の理解、理論の理解と諸概念の論理段階「抽象上の位置の確定」を明白にしたうえで、問題の理解に進まなくてはならないのである。この点、「従来、一般に『諸形態』は、その最初の三分の一の部分を中心に、『共同体の諸形態』に関する分析をおこなったものとしてとり扱われてきた」(同上)。しかし、実は『諸形態』は、『資本論』第二章(いわゆる本源の蓄積)もそうであるように、資本主義的矛盾の本質にせまる論理的労作」であり、したがって、「特殊資本主義的所有形態とそれ以前の所有形態との質的差異の対比、および後者の前者への転化の事情の論理的考察」にあてられたものであることを明確にしたのは芝原氏の見解だったのである、と原氏はいわれる。

さて、ここで一言すれば、もし原氏のいわれるように、「アジア的生産様式が本源的所有に対応する原始共同社会」無階級社会を総括するものであるなら、古典古代やゲルマン的共同

体の所有も本源的所有なのだから、これらの共同体―社会もそのなかに含まれてしまうということになるか、もしくはこれらの共同体はそれ自体階級的だということになってしまふものではないのか、という疑問が当然生まれてくる。

次に、私たちの目的は、マルクス学説史の研究ではなく、歴史的事実を対象としての、その理論的把握であり、たんに「マルクスの著作の年代別整理を主要基準」とすべきものではない、という点はその通りであろう。しかし、年代別整理や学説史的研究がマルクスの理論を明確にする側面がある限り、それはそれなりに有益である。問題は、マルクスが『諸形態』を書いた以後の、たとえばモルガンやマウラーの著書からの知識の導入によって、『諸形態』の理論が補正されなくてはならなかったかどうか、という点である。さらに『諸形態』の三分の一が「共同体の諸形態の分析」かどうか、という点は『諸形態』の最初の三分の一は、「所有の本源的形態」についての考察であると同時に、「所有の本源的形態」の分析に必要な限りでの「共同体の諸形態」にかんする説明でもあり、それが、資本主義的所有と前資本主義的所有との対比および、後者の前者への転化についての前提的考察となっている、というべきであろう。

さて、原氏の所説にもどるが、氏は、こうして、芝原氏によって、始めて「これまで『諸形態』において中心的位置を占めるかに考えられてきた『共同体』は、①『所有』就中『前資本

『資本制生産に先行する諸形態』について（四）

主義的所有』にその地位をゆずり渡すべきこと、しかもそれは、『諸形態』では、『所有』の問題追求上の条件的位置を与えられているにすぎないこと、②またそれは、『諸形態』では、階級関係が捨象された一抽象物として扱われ、その歴史的性質の位置は、理論経済学ではいつもそうであるように、論理段階的地位に完全に従属していること、③それゆえ『諸形態』で使われている、『アジア的』『スラヴ的』『ゲルマン的』等々といった固有名詞に何らかの歴史的性質を即座に関連させるとすれば、それは『理論の無理解』の所作と呼ばれなければならないこと、等々が明らかとなった」（同上二六ページ）と原氏はいわれるのである。

さてこのような理解に立って氏は、マルクスが『諸形態』の草稿に付した『心覚え』の見出しは、内容に即して言葉を補うならば（「」で示す）、『資本主義的生産に先行する「前資本主義的所有の」諸形態（資本関係の形成または本源的蓄積に先行する「前資本主義的所有の解体」過程について）』となるであろう。なおここで補った『前資本主義的所有』とは、『本源的所有』と『第二次的所有』を包括する謂である（同上）とマルクスの『諸形態』の表題を適切に補足する。

ところで、原氏は、『諸形態』では右のように階級関係が捨象された一抽象物として扱われ、その歴史的性質の位置は、理論経済学がいつでもそうであるように、論理的、段階的地位に完全に従属している、といわれているが、『諸形態』は先資本制

『資本制生産に先行する諸形態』について(四)

社会の所有形態を主として考察し社会構成体そのものを取り扱っていないのであるから、階級関係の分析が捨象されざるをえず、所有の第二次的形態は、それが社会の支配的形態となるなら、それ自体階級社会を意味するものであるが、『諸形態』では、所有の形態論として、社会構成体との関連は捨象されているため、そこでも力点は所有の本源的形態との対比に置かれている。

さて、原氏は『諸形態』の目的を『諸形態』の表題を補足して明確に規定したのであるが、この「目的性からして『諸形態』の「論理構成は次の二点に要約される」として、「(一)資本主義的所有の特徴が、自ら労働する諸個人とその生産の諸条件との分離、すなわち前者による後者の非所有、であれば、前資本主義的所有の特徴は、前者と後者の即自的結合である。ところで、この前資本主義的所有は、自ら労働する諸個人が即自的に結合しあう生産の諸条件とその結合のしかた如何によって、二の可能にして必要な論理序列に分類される。

(A) 本源的所有——労働する諸個人にとって、ここでの生産の諸条件は、諸個人の生存と同時に、労働に先行する前提としての自然的労働諸条件(土地・自然的共同体等々)であり、したがって労働する諸個人は自分のものとして彼の生産と再生産の諸条件にたいして関係する。

(B) 第二次所有——ここでの労働する諸個人とその生産の諸条件との関係は、

(イ) 所有対象そのものがすでに労働の生産物(手工業の用具・家畜等)であるか、

(ロ) あるいは、労働する諸個人がすでにある第三者たる個人または共同団体のために行う生産の自然的条件の一部としてくりこまれてくる(奴隷制・農奴制等)かである。したがって、(ロ)の場合労働する諸個人は自分のものとして労働の客観的諸条件に関係しない」(同上二一六—二一七)と整理された。

右の原氏による整理・要約は、『諸形態』の内容を正確に伝えるものであろうか。残念ながら、不純物が挿入されているのである。氏は第二次所有の(イ)として、所有対象そのものがすでに労働の生産物であることをあげているが、これはどういう意味であろうか。マルクスによる本源的所有か二次的所有かを区分するメルクマールは、氏のあげた(ロ)の点である。所有対象そのものが労働の生産物であるか否かはこのばあいには問題ではない。とはいえ、本源的所有のばあいの生産条件は必然的に自然的条件であり、そこでは、たとえば資本主義社会でのように、資本的経営的条件の占める比重は大きくない。だが、将来の共同所有社会では、労働の生産物の占める割合は大であろう。にもかかわらず、そこでは人類はふたたび本源的所有に立ち帰っているのである。原氏の結論の(ロ)こそが、マルクスにあっては本源的か二次的かの唯一のメルクマールである。

前資本主義的所有と資本主義的所有との対比、前資本主義的

所有のなかでの本源的所有と第二次的所有の區別については、マルクスが『諸形態』ではじめて、極めて論理的に抽象的に解明したところであり、またこのことから、本源的所有が、したがって当然その第一形態である土地所有のアジア的形態を基礎として成立する「アジア的生産様式」が、その後の階級社会と異なることを、私たちは知ることができるのである。

以上のように、原氏によれば「対比上の論理序列」を『諸形態』の叙述の中に見出し、本源的所有と第二次的所有との區別を明確（二七ページ）にすることが必要であり、さらに『諸形態』は、「前資本主義的所有の結果であり、前提でもある自ら労働する諸個人のとりに結ぶ社会的諸関係にも論及し、『自然発生的共同体』『ツンフト的同職組合機構』『奴隸制・農奴制』等々の序列で論理的解明」をも行っていることを認識すべきである」といわれる。すなわち、『諸形態』の論理構成は、対比上の論理構成にとどまるものではない、として原氏はいう。

「それは、前資本主義的所有の資本主義的所有への転回的事情の論理的考察をも同時に含んでいる。このことは、次に掲げる『諸形態』の一部から読みとることができる。

生きて活動する人間と、彼らが自然とのあいだに物質代謝するさいの自然的・非有機的諸条件とのあいだの統一、したがって、また人間による自然の領有こうしたことは説明を要することでもないし、また歴史的過程の結果でもないものであって、むしろ人間的定在のこれら非有機的諸条件と、この活動

『資本制生産』に先行する諸形態』について（四）

する定在とのあいだの分離、賃労働と資本との関係で完全なものにはじめて指定されるような分離こそが、説明を要するし、また歴史的過程の結果なのである（三三―四ページ）。

すなわち、『諸形態』は、資本主義的所有と、それ以前の所有形態との本質的対比のみにとどまらず、後者が前者に転回する過程、言い換えれば、生きて活動する人間と、その活動の自然的・非有機的・諸条件との即自的結合が、賃労働と資本との関係で、完全なものに始めて指定されるような分離に転回する、そのプロセスを論理的に解明・暴露することを課題としている。このことは、マルクス自身がつけた『諸形態』の見出しの副題、『資本関係の形成または本源的蓄積に先行する（前資本主義的所有の解体・原）過程について』、にすでに要約されている。

前資本主義的所有から資本主義的所有への、したがってまた本源的所有から第二次的所有への転回は、『諸形態』では、歴史的、具体的に、いわゆる歴史的叙述として、叙述されているのではなく、あくまでも論理的に、いわゆる『下向分析的』に果されている。そしてその転回を規定する要因は、生産諸力の一定の発展段階とそれに照応する生産諸関係の総体としての『社会の経済機構』（『批判』序言・『諸形態』では『経済的前提』）の『固有の弁証法』によって説明されるが、その際、『諸形態』では、『それ自体生産力の発展程度を明瞭にしめす分業、またしたがって交換的作用（それが原始的には掠奪・戦争とい

う労働形態であろうとも)等々が、所有諸形態、とりわけ私的
所有の発展における動産的要素(家畜・奴隷・貨幣等々)の蓄
積と関連して、より注目されているのである(『覚書』四ページ)
(同上二七―二八ページ)。

ここで一言しておく、原氏は「論理的に、いわゆる『下向
分析的』に」とのべているが、論理的な叙述は「下向分析的」
ではない。下向分析的なのはマルクスの研究方法であり、論理
的な叙述はマルクスにあつては逆に抽象(本質)から具体(現
象)への上向的記述である。だから論理的ではあつても下向分
析的ではない。

さて原氏は続けて『諸形態』の論理構成を以下のように説明
する。

「(Ⅰ) 本源的所有諸形態(アジア的・古典古代的・ゲルマ
ンの形態)が、その第一の前提である直接的な集団所有から
順次に、集団的所有の消滅的諸契機、すなわち私的所有、の
発展の序列にしたがって配列されている。」

(Ⅱ) 本源的所有が全体として第二次所有に転回する諸要
因、諸結果を、両者の対比において論理的に解明する。

(Ⅲ) 最後に、終局過程に客観的労働条件の資本への転回が
論理的に解明される。

そして「この第二の論理構成は、第一の『対比上の論理序
列』を、論理的な意味での運動序列・発展序列として補つたも
のに他ならない」とのべ、「以上、一・二に示した論理構成は、

『諸形態』では、統一された二重の論理構成として全体に貫徹
しているが、このような『歴史分析の面と同時に、論理的分析
の面に注目をうながし、全側面の統一的把握の方向を示したこ
と』(上山春平「前資本主義社会の分析方法―共同体論・原著
論・地代論―」『新しい歴史学のために』六七号・一九六一年
四月)は芝原氏の第三の功績である。特に第二の論理構成で示
した(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)の序列は、『諸形態』の叙述の一つの
可能な章別編成と見ることが出来る(同上二八ページ)とされ
る。

以上が原氏による『諸形態』の論理的構成の解釈である。

(22) このように、「集団的所有の消滅的諸契機、すなわち私的所有
の発展の序列」によって、本源的所有の諸形態が配列されてい
るという解釈は、比較的多くの人によってのべられている。そして、
たとえば小林良正氏のように「共同体所有にたいする私的所有とす
る解釈もある。しかし、共同体所有と私的所有(または個別的所
有)との関係は「自己自身の存在のために他者を必要とする」もの
であり、ただ両者の関係の仕方によって、三つの形態の差異を生み
出したものであると理解するならば、単純に共同体所有と私的所有
を対立関係としてとらえ、あるいはまた「個々人の共同体への埋没
の度合」の区別によって、共同体の三形態の区別としてとらえるこ
とが誤りであることがわらう。